



関根正直編輯

近體 國文教科書

東京書肆 十一堂發行

明治 230
44
卷 1



天地乃なははまよく西より東より
あまの邦土分裂しつゝこゝろは慣
習を異し其風氣もまた遠く異國
語をこゝろの風氣もまた関係殊よ
志をこゝろのなりし世を辟きしを
國民ハ猶珠玉のこゝろに玉語ハ之を

近國文教科書

聯絡する糸のようなくも御國
 の言語は優美として其の變化乃
 自在なるはむしうの事人々の以
 てはやおのるのみならずの一事
 概を擅とする歐語も亦るは若
 りまゝに扱はぬ世は斯道の人等

の一は其の事少くも其の事多
 けは古言の事たるは其の事
 もあつて今やうはをさく用たる
 も如きの事ありあはるるの事
 せざる徒ら出外なる事ありし
 こと法の則をおきかめて普く

「朕おのまは言靈の幸と國
とはなる民草の名よとて
は、そは他一國の言語の
如きあるに、御國の風
氣の表運を、まはらむ
に、関根正直君のこゝに編あ

は、まは保法の事り、
さるる

井上毅識

小中村義象書

夫、國文とは、國民の結合力を堅うする、一の元素と
 なるべし。然るに現今、世間を行きまわると、國文を
 かく支那西洋の筋も入り雜りて、語格文法の濫
 りあり、更ま、此國此文といひがたし。又近來、國文
 を習ふん料の書も、かれこれ世に出たきど、多

近國文教科書

例言

國文と、國民一統と貫通し、同胞一體の感覺を與
 ふる、一國特有の顯象ありて、其もろくきは外國
 に對して、國民の結合力を堅うする、一の元素と
 なるべし。然るに現今、世間を行きまわると、國文を
 かく支那西洋の筋も入り雜りて、語格文法の濫
 りあり、更ま、此國此文といひがたし。又近來、國文
 を習ふん料の書も、かれこれ世に出たきど、多

らは、いゝゆる雅文をふらち古文をとりて、模範
 とあつれば、擬古のわざを習はんも、ハ、さてもあ
 れ。日用通行を目的として、當今の言事を書き記
 さんよそをさぶる不適當と覺申およそ、古文を
 今人の耳どほく、今やうそ、又不規則難澁にして、
 言の意まぎらなく。さるは、古きをすくく引き下
 げ、今やうなるを押しあぐて、古雅よ傾らず、鄙俚
 に流れむ、平暢ふして通じ易く、漢語俗言をも雅
 へあがく、國文の脈を失もさう、ん程のものこそ、
 見まほしけきと思ひて、さるかこの模範とある

べきものを撰集して、國文教科書と名づけつ。
 此書に載する文章の順序も、あまがち、作者の時
 代よ拘らず。達意を主として、平易よ書きあせる
 ものを始めとく、やうく流暢なるものよ及べり。
 文中、語格を誤れるやうよ見ゆる所を、讀者よ注
 意のしめ、試みよ、□を以て用みかこころよ、正し
 き方を注し置けり。又、一章毎よ出典の名をも記
 して、原書を尋ねん人の、便宜をそのれり。
 此書よ撰める文章も、國文の模範とあるべきも
 のを主とし、れど、文態も、いか程巧妙よして風

流し、論旨を高尚し面白くしても、猥褻よりくる
件、又も初心の人の、能うせむとあはれぬ方子思ひ
違ふらんふくあるものも、すべからば採らざるは、
人の心得であるべき事をと勤めとり。文を習ふ
が目的よとあきど、兼ねては、徳育上の裨益とも
なまかくとの、心がまへあり。

明治二十一年三月

編者識

近體 國文教科書上巻

標目

修業の心得

老人の言も、経験より出づ。

小兒の才藝、頼み難し。

善を基むるも、妄りにけがたし。

人の信偽を、おのが心のまじ也。

時刻を、おのが急る者のまじ也。

さうまぐのありさへい。

魚鳥の食

松木直秀

荒井亮民

橘 南谿

同

柳澤淇園

同

同

伊勢貞丈

餽り太刀

書札文字の死活

難字をかゝるよかくべし。

知を開くも、學問の効

一つ宛勤めて、事と仕遂げよ。

人子交する道

身と世をわける舟

世俗の怪談をべて實ある。

卑下よも程あり。

平生心がくへきと

伊勢貞丈

菅 茶山

三浦浄心

貝原益軒

同

同

同

同

同

妻のつとめ

身の程を知りて、樂しむべし。

無益は時を失ふことなりき。

くもの目を惜むべし。

人を恥心あるをよしとす。

唐崎の孤松

稚児の教養

女の四徳

志づかの貞烈

むかしの士風

同

同

同

同

熊澤了芥

瀧澤馬琴

中邨惕齋

同

室 鳩巢

同

細川幽齋文武のほまれ 新井白石

結城秀康關東の大將を承る。 同

直政初陣の時母の誡め。 同

大江廣元を論ず。 同

北條泰時奸僧を逐ふ。 同

封事の大意。 同

(Faint bleed-through text from the reverse side)

近體國文教科書

關根正直編輯

○ 修業の心得

松本直秀

何事もゆるぎず業を就きては、怠るべからず。成効
を急ぐべからず。唯常に心をこらへて存すべし。成
効も急がれども、退屈の念生じて、事遂げ難く、業に
就きて怠るべからず。面白み真間も生じて、成効の
全きを致さべし。學問の道も、事業の中も、最も
難きものを、最此處に心得多くあるべし。

らず然るも、學生の常として、初めの頃は、隨分能く勉強せざるも、やうやくみして、退屈の念を生じ、其甚しきと、終に廢學せざるも至る者あるも、畢竟成効を望むの急あるも、因行り。大工左官の如き、卑近の業すら、なほ且數年の年季を入れて、これを修むるにあらずんば、其大工なり左官なり、一人前の職工ととある事を得ざるもあらずや。まゝして、人のくだる道を修め、士大夫の師表たるべき、學問の道として、さも容易に成就すべきものならんや。元來人の精力を限りあるもの

望むの急たる
正しくてもゆまじ
事之急たる云々
とあるべきなり

なきを、非常に勉強するに却りて、非常の怠惰を生むるものとありともあるべし。故に非常の勉強を要せず。眠食常を失ふとなく、職ある者を職に従ひ、産業あるものを産業を治め、さて後暫時も暇ある時心を専一にして、修學すべし。朝は温めて、夕は冷すと勿れ。昨を勤めて、今を怠ると勿れ。かくの如くにして、日々に變むるをなく、月を累ね年を積み、て、やまざるんよ、餘業は學ぶ者といふとも、成學の効驗があらず見るべき也。事業中最難しとする、學問の道として、すては然り。

然らば、其他の事の如き、此心得を以て勉むるに於きては、何事をり、なり果さざらむや。 琴園漫録

老人の言も、経験より出づ。 荒井克民

老人長者の言も、少壯の人情よて、これを聞けた、迂濶あると多々きども、年の功を積みて、事とことごとを經る事多々きば、後日よかあらずとて、あり。少壯の人も、天質聰明の人といへども、見識終よ及むざる處あり。然るを、後生の輩も、例して老人のよを迂濶とす。老人も其身よ試みて、効あるの言を以て訓へとありんとす。然るよ、後生を、聞

のこつふ手糸 波を佛詞の下

よ置けるこそ 俗のあつひを れど誤りたり 注意すべし

くを厭ひて毀り詆る。其者、年やうやく長し、事よ涉るとやうやく多きよ及びて、始めて、老成の言の佩服すべきを悟る。これをわのが、險阻艱難を、つぶさよ嘗めたる後よあり、これを知り難し。

梧坡教諭

小児の才藝、頼み難し。 橘 南谿

小児のあひどに、書画をよくし、詩歌よたらみなる、皆人の稱美する事なれども、多くて、年長しとて、後よよの勝きたる事も、なくなるもの也。其父母或は他人よりも、小児の事なきを、行く末頼も

く奇子思ひて甚譽むる故自然小児の心も由
 かんを生じしや。是もて世間も勝れしやと思
 ふより後に至り平常の人にも及むざる様も
 成るあり。其父母少くも譽むるとなく随分才藝
 德行拔群も勝れしや師も從しめ其小児の心
 にも仰ぎても其師も何事も及まざるやうも思
 こしめきびしく修行せしめ長年の後ふどお
 人も勝れざるん。余もむろは小児の奇才を譽
 き譽めしや其後才ありといふ小児は猶々
 教訓を加へ其小児をして大成せしめんとねり

へり。北窓瑣談

善を譽むるも妄りも志がこ。

同

人のあしき事を語るべうとする事あり。書き志
 る置くとさう也。悪聲一たび世に流布しては
 取り返す難きものなり。善事を言ひあすは盛
 徳の事よてさう過譽ありとて強ひて害もあ
 らずと思ひ居りしが鈴鹿の孝子の如く幼年の
 時其名高く公よりも褒美し給ひけるが年長
 トて後其穢行多く又博奕をとり好みてよろ

断るゝことむ
よあゝずる
所を必きとあ
るべきあり但
しぞあんやか
の結ひよと留
むるは拾なり

づ常人にても其行ひ及びが々まきバ、其里の庄
屋ふど、たほやけの咎めを怨きて、どかく異見を
加へけれども、更よ聞き入れずと風説ありしが、
いかゞありしや。こきらの事よ就きて思へば、善
事を稱譽さるとだふもみづりよ志のつゝ。人始
めあゝざる事なり。能く終りある事すくなりと
いふ、古語も思ひ合されき。北窓瑣談
人の信偽を、おのり心のまゝなり。
柳澤淇園

偽りも、おのきけ偽りあり、引き出すものなり。偽
りも、遂ぐる時ハ、信とあり、信も遂げざる時、偽
りとなれり。さね嘘も誠も、まどとる者の心よ
ありて、おのれ誠ありて、人ようそある事なく、お
のれ嘘ありて、人よ誠をあるべからず、唯、人よ
てむらうききえ、心の疑ひ一つあり。兼好法師も、
迷ひの一つおそるゝと書きしれども、迷ひえ、表
よつらるとあれど、おそるゝとことども、恐るゝよ
足らずして、捨て易し。疑ひえ、心よありて、あゝは
す所なきが故よ、捨てがたし。雲萍雜志

時刻を知らずとも、怠りもの、業なり。

同

ある人、時刻を知らんためとして、自鳴鐘を求めんとするを、其妻、これをとめていひける。明け暮れよ、かゝるや、世ののみよあらずらむいとも折りかゝるを、其ひまを費し、とけいのためよ、返りて、時を失ふと多わらんや、め給へといふを、さあらむ庭鳥を飼ふべしといふよ、其妻またととめて云ひけるは、時刻を人のうへよあり。汐の満干も、これとおなづらふべし。とけい鶏を便とせむ

は勤めよ怠りもの、いつくすともありと、夫を諫め

遂に、鶏をも飼ふべしとありよき。雲萍雜誌

同

本曾の山中など、深山幽谷まで、岩茸を取らよと、ふぐつとつものを造りて、綱をつけて、をつとえ、それよいつりて、其妻またの枝よりさげて、つりたる、引き上げあどして、谷間の岩茸を取りぬ。とぞ。下を幾丈とも、限り知れざる所なるよ、見し人物が、わたり。も、あやまちて、綱のきれて落ち、ちとらんよえ、命あらふべし。又、伊勢の浦まで、あ

取りぬかしを
らうの文書
取りぬかしを
らうの文書
すべし所なり

まの蛇とるも、乳のみ子なんど引きつきて、を
つとは、權をつかひ居て、舟もかひするに、妻も海
底に飛ひ入り、くわくわくと貝をもちむらうらよ、
子の乳を尋ねて、よくと泣く聲の水底に聞ゆる
よぞ今一つ得ましく思へど、子の泣く聲の聞ゆる
よ、ひかされて浮びいで、舟なり取りつき、息も
つきあへず、子は乳をとりありさき哀しめて、
實に惻隱の心も發動すべし。せしむるよし、さき
づまなる中に、あつた過ぎともひも、輩もあつたも
のを、家もあつて、其日を樂し過ごつる身を、いと

あり難き事なあらずや。雲萍雜誌

魚鳥の食

古に、魚は鯉を賞翫し、鳥は雉を賞翫しけるも、
仁徳天皇の御時、秦の酒公といへる人、鷹をつか
ひ始めしより、鷹狩りよ、雉をとるしむることも
ありしあり。故に、鷹の鳥といへむ、雉の事なり。雉
を賞翫するを、此故なり。鯉を賞翫する事、龍門の龍
龍門の龍 大和國吉野郡あり なるのほれた、化して龍
とあらむといひ傳へ、めでたき魚とて、賞翫する也。
さきむ、庖丁家にも、雉と鯉とを庖丁の故實習ひ

ある事と聞き及ぶ。今の世もては、魚と鯛、鳥と鶴を賞翫し、雉、鯉などは、賞翫せず。かやうのものも、時世もて違ひあり。今の世、鶴の庖丁といふ事あり。古よりありし事。古書に見及むず。秋草

銚り太刀

同

けよと、太刀は銚りなきをさる。然るも、銚り太刀と、なげけたるもの一種あり。何ゆゑよ、是も限りて、銚り太刀と名付しよ、と考ふるに、銚り太刀も、木刀又鈍刀を用用て、其外面をかりを真劍の如くし、銚りよよりての故あり。是を儀刀と

用ひて
用ひの假定を
行中二段の法き
一行一段といへり

其論一
定せ
ず
疑を
か
用ひ
と
わけ
る
非
あり
論

いふものもて、唯威儀を助くるためもて、武備も用用るもてあり。おほそ、官は文官あり、武官あり。文官とは、治世の事をつかさどり、文道を以て、つかうまつる官をいひ、武官とは、非常に亂を鎮むる事をつかさどり、朝廷を守護する事を以て、つかうまつる官をいふ也。文官は、太刀をばく事なく、武官は、かゝらず太刀を帶する。これ定りしる法なり。又、文官もて武官と兼ねる人、太刀を帶するあり。又、武官と兼ねむといへども、大臣など、威儀を助けんがため、詔して太刀を

く事をゆるし給ふ事あり。これを勅授帶劔といふ也。此勅授帶劔の人を、文官もて武官もあはざるが故よ。木刀或は鈍刀を、真劔の如く、飭り成して帶せしむ。是を飭り太刀といふあり。 冬草

書札文字の死活 菅 茶山

書札の文字も死活あり。譬へば、一筆啓上仕候より、「御無事」「御堅固云々」「私宅無恙」時候御自愛「猶期後音云々」を何事もあるきよも書くもかたがたるも、知れぬ程の事あり。其いまよ、此間の寒氣を弊郷を、海濱に氷を見或は半月一月の早りあるよ、

餘所よは夕立ちすきぐも、こうもい、あつずるもいふも、同じ寒暄をのぶるよも、其地の景色も思ひやられて書状の文字も活するあり。月日の末よ、此書認めたる時よ、雨志きりよあり、時鳥、二聲三聲おとられなとあきしむるをいふく、其時其人のあも、思も、やうよておとる。長さ三尋餘りある書札よても、死ししるあり。三行四行の書よても、活きたるあり。くねくね書れよあきくを、詩歌連俳よても、心づくべき事あるべし。

筆のすまひ

難字を假字に書くべし。 三浦浄心

佐々木大學介といふ人、山上半藏といふ者も申されり。近日大阪へ御陣立ての御ふれあり。某能きよりひも持ちたうが、うぶと氣もいはず。御目をかけらるる大名、着料のかぶと多くあり。一押し、所望の状を、遠もすべし。其方、能筆をよむ、書きてたぐと硯をいづす。半藏筆をとり、うそかぶらるるいふ字を、いづれれを書き候ふべしといふ。大學介きりて、これ不文なり。かぶらるるいふ字あまらば、いづれれありとも書き給へ。半藏

聞きて、さねて、甲曹の二字を、日本よりよむ、かぶらるるいふと読み來る所、禮記の書は、甲をよむ、いふ曹をかぶらるるよみ候ふ。此二字の読み、さねて、まよ、漢和相違せり。然るに日本読みよむ人あり。禮記のよむを本と用ひ給へる方もあり。人々心々よむ。すべて、此かぶらるるの文字も、相違ありん時よむ、いふとす、筆者のあやまりよむ。そあり候ふべけきと、筆を捨て、退出す。それ此義を能筆の人よ語りなれむ、老士聞きて、日本え、よろら、唐國の例を學ぶといふ。又相違の義

多くあげて記すがごとし。されど遠州よりつさうと
いふ里より當年仔細ありて、數多所より江戸御城
へ申し來る文より目坂新坂八坂外谷と書きこり。
正字ねぼろなり。これよりありて。此中此里の御
制れども假字を書きて遣るたり。かぶと
ふ字も、甲冑の二字の外より多し、執筆の半藏不文
字も、これを知らざるや。たゞ正字を知ると
つゝ共、さう當りて用の事あるを假字をかきて
よろしあはるべし。難字をかきて讀みとみずむ其
用調ひがごとし。さて何の益あるんと申されき。

慶長見聞集

知をひらくて、學問の効、 貝原益軒

おれを、人の不孝不忠、もろくの悪を行ひ、慾を恣
み、身をほろぼし、家をほろぼすに至るを、何よ
うよれむや。知を付けねをあり。又善を行ひて、家を
興し、身をたらし、譽れを得るを、何の故ぞや。知あ
れむなり。知あまは、よく善悪を志し、善のあすへ
き事を知りて行ひ、悪のなすまじき事を志りて
行はず。この故より、知を身の内の火ある寶なり。學
者道よ志さむ、知を求むるを第一とすべし。知を

ひよく事を、學問の功よあらずんば成り難し。

大和俗訓

ひよく宛勤めて事を仕遂げよ。

同

おおよそ務めよ體屈し、久しうつとめ難きとおほ
かこそ、精力の弱きよとあらず。氣随ふして事を
つとむるをきく心いそがしくして短きゆゑ
むづろしく思ひて、早急ないつするものあり。
心静しして、事をきくを次第に随ひて、一つ宛
やうやくよ勤むれど、久しう勤めてもつかねず。

怠りなしく、ゆみをはげむれど、志づかよして、もてか

ゆるものあり。 大和俗訓

一人の交する道、 同

人は交するよ、愛敬の二つを心法とす。これ、簡要
の事なり。誰れも、知らずんばあるべからず。愛と
は、人をあをねむをいふ。悪まざるあり。敬とは、人
をうやまふをいふ。あふどろざる也。人を憐むを
仁なり。人をうやまふを禮あり。仁禮を、心のうち
よたもちて、人を憐み人を敬ふこと、忘るべからず。
これ、人は對して行ふべき善なり。父母を憐み、主

君をうやまふも、つゝ及ぶず、疎き人卑しき人
も對して、其位は從ひて、よき程は愛敬すべし。
あるどり、知らずかよすべし。これ、人よまど
る道なり。 大和俗訓

身を世をうつる舟

同

世を海なり。身を舟なり。志は楫なり。楫をあし
とれむ、行くべき方よゆくず。風波はあつたを舟く
つがへるが如し。志のゆちやうめん要あり。あ
しく志しをもて、身をらつたかへす。楫のとりや
ら、あしきとて、舟をうつぐんすが如し。 大和俗訓

世俗の怪談をて實なり。 同

世俗の語り傳ふる事、そのこと多く、ことごとく信
ずべし。ことに、あやしき事、多くを偽りなり。
神佛の奇特も、俗人の語り傳ふる事、そのこと多
し。おもしろ、正法も奇怪なり。奇怪あるも、正法よ
あしき。奇怪ありとて、貴ぶべからず。神佛をほめ
むとて、なきことを作り出し、或を似し事、誠し
いひまじ、奇異あることを言ひつけて、かいつて神
佛の徳をけがす事を知む。鬼魅狐狸の志、まじ
よ、奇怪あることもあり。そきも多しとて、そのことあり

かいつて
ふしきかへ
りてとあま
し此例下
あり皆同

悉信すべからず。おろかなる人、そのるあるそ
らどを信じて、迷ひやすし。そのを作らて語り
つゝあるとせよ多し。信すべからず。妄りみ人の
言葉よ任せて、語り傳ふべからず。人の胡言うごんを
とを信じて、まゝ人よ語きむ。我もまゝとてこと
をいふの罪あり。謹み人よわらざるべからず。

大和俗訓

卑下にも程あり。

同

我身を卑下して、人よ高ぶらざるを、誠よよし。さ
れど、餘り卑屈にして、へりくだりすぎ、着くべ

き座席をどよも、たやましくつゝ、道ゆくにも、我
がさきへ行かばき位なれど、辞してわうげ、我が
前よめくり来らる盃をも、吞まざして、人の言葉
を多くつひやさしむるも、返りて無礼あり。唯我
が當然あるべき程をむあやがちよ、強し辞退さ
べからず。位ある人、老いたる人、下座よありては
いやく若き人の居るべき座をくして、おのく
其處を得ざるもあり。然れど、卑下するよも、過不
及なからず。 大和俗訓

平生心がくべきこと

同

ほろがすも、多くは妻のとが有り。戒むつ。妻の
徳を、謹みておごらず。夫と志うとよ受け従ひて、
まがまゝならず。女工を能くつとめて、急ぐつる、これ
婦人の徳なり。かくの如くよして、よく家を保つ
べし。夫となれる者を、愛はおぼれず、必、婦に教へ
て、家を治めしむべし。 家道訓

身の程を知りて、樂しむべし。

ひろき家は居てもむらゝの穴もすみ野に居り

し時と、今のまどしき人の、ちよふの小屋のいぶ
せきを、思ひやりて、樂しむべし。穀肉を食して、
むらゝの人の、木の葉、草の根を食とせしと、今の
餓ゑよするやめる人を、あされむべし。きぬを着て、
あつらひして、むらゝの木の葉をつりて
きたると、今の衣をくして、こぞゆる者をあそ
れむべし。まがめしつうか奴婢あつた、貧しき人
の水をみまづかしく、苦をおりかべし。かく
の如くなむ、樂しむ多しして、上をねがふ外の、
求めまらざるべし。 家道訓

無益よ、時を失ふと勿れ。 同

いとけなきより、さかんに成り、老いよつくり衰へて、死に至るまで、百とせの齡も、亦いく程なり。人の世はあると、假りよやどねる、旅人のごとし。東坡が詩よ、一年一夢の如く、百歳真は過客といへるもうべなり。かく短き世なれを、無用のことをなして、時日を失ひ、或もいふらよ、なすもなきて、此世なれなん事を、そむべし。常は、時日を惜み、益ある事となり、善をすることを樂しみて、過ぐさんこそ、世よつけらんかひあるべけれ。 樂訓

けふの目を惜むべし。 同

棒ら、さう立ちより、年のられ行くまで、いふが如くよ、おもほゆれど、時日の早く過ぎゆくを、止めあへず。うべも、どりと名づけ、又、ときといへるならん。さう水を、光陰箭の如く、時節流るゝが如くといへるも、うけるところあらず。老いよむくむ、猶さうよ、年月の、早く過ぐる事、あさうも、飛ぶが如く。あとをかへり見れむ、いそぢのよそいをも、過ぎこゝも、さうのみ久しからず。うそい、いそぢの後、又、いそぢの齡を経て、百とせよいたるとも、なほ

思いやしれ侍
侍りとつふ詞を
致語をまをん
よ對してつふ
もより常の記
事文よこつふ
べからず

行くべきの月日いよく、早くして、程を盡きま
ん事、思いやしれ侍る。幾程なき、残れり、齡をこの
しみてこそ、過ぐさまほしけれ。うねいふるし
て、空しく過ぎなんといとおろりなりや。年よ
花を相似たきと、どくぐよ人を同ドかす。老い
かさなきを、一とせの内よも、やうやく、衰へゆき
て、今の昔よ志うず。後の今よ志うざるとを、知り
て、兼ねてより、悔いなるらん事を思ひ、時日を惜
み、一日もいづづよ、過ぐすべからず。けふ暮れ
て、明日もありとて、たのむべからず。けふの日の

侍りとの下い
へりともあらべ
きられとらふ
思せらるる

うちを、目よ惜むべし。樂訓
人をも、耻心あるをよとす。熊澤了恭
心交問ひていよく。今の世の、幼少の子も、大か
知藝能あるが如く、昔も、きうざりし、秀でたる様
なる者多し。然るよ、世間の人を、次第よ、老りゆく
事を、心得難き事よ侍りと。答へていよく、然り。
田よ植うる稲も、晚稲ほと、取實おほし。今時の、子
供の利根あるも、稲の早稲の如く。おとふよなる
程、智慧の取實すくなし。其うへ、平人の利發とい
ふ者と、大かと鈍なるものなり。そのまぶの、瓜く

ちへして赤面し人前までものいひかぬるを知
 あきまかよして耻の心ある故なり。人よ存する
 ものを耻心よりよきをたす。耻の心あきららうな
 る者も學問しても君子の地位もいつり、たと
 ひ無業でも平生も人がよく軍陣まで入る武
 勇のもくきある者なり。昔の童どもも入る、
 ちへする者おほう。故に成人も随ひて、一役
 の用子立つ者ありき。今の目もをべも人をめせ
 ず。人前でも利發よものいひ、立ち居ふるまひ
 よい。この故に成人する程用人も選ぶべき人す

くなし。人の親たる者、徳を志しざれば、耻心ある
 子をむ、叱り威して耻心を止し、耻心をき子をを
 ほめ愛して、いよくほらしむ。賢才も、目くも衰
 へ、驕吝も、日くも長ずる所なり。かなしむべし。

集義和書

唐崎の孤松

瀧澤馬琴

七月廿一日、から崎の松見んとて、未明に京を立
 ちて、白川越えをす。湖水の眺望、いづれもあれど、
 白川のたうげより、見ろをよしとす。三井寺、これ
 子垂ぐ。世も、近江八景の畫圖多しといふとも、ま

のあうり見るとて、遙に劣れり。八景あひ去ると、
 だがひよ遠し。白川山より見れど、一瞬千里然れ
 ども、比良を石よかられて、堅田矢走も、晴れられ
 ぬ、見よきがごとし。この好景、畫くとも、筆よ及び難
 く、述ぶるとも、詞よ竭し難し。近く見て、ますく、う
 れしきものも、石山と、かき崎の松なり。北より南
 ります枝、三十間むり、東より西よいうりて、廿
 間余、幹も、ふくかきへよ餘り、木の文、高かきずし
 て、まん丸も茂生す。洛陽妙心寺の松、島原角屋の
 松、及び、住吉難波屋の松、いづれも、よしといへど

栽ふかへるとて
 替ふとつみ細と
 下二段のまゝ
 きなりを栽ふ
 かふとて、云々と改
 むべりかへると
 いふと俗の祀り
 たり

か、から崎の松、対して、同日の論よあらず。實
 に、天下のひとつ松なり。傳よいそく。から崎の松
 枯れしうりし時、明智光秀、栽点かへるとて、
 外に、いづれも植点かん。ひとつ松、うりて吹け、
 志賀の浦風、その後、これも枯れしうりかを、長
 嘯子、又栽点らる。これも、亦かかれて、今の松を、近時、
 某侯のうゑらましとつふ。松のめづりよ、かき
 をゆひ、岸よ、石崖を志て、いと嚴重よ見ゆ。近年、
 枝條ますく、垂茂すを、石を築き出たすと、
 志むくありとぞ。松の前面よ、から寄明神、いせ

つ、をどして、ひぐみ曲け、癖つけ、貧りねらむ心
 引きいづ、さるのみよあらず、何事も、其ほりき
 儘りて、戒むべき事を、かへりてす、め、答む心
 き事を、返りて笑ひ、あく限り、さるき様さま子、深め付
 け、つりなりて、智慧づきたる後、戒むれども
 きかざ、うち役さるても、直らざるを、本性あしく、
 生れつきたるものとのみ思ふと、いとおろろよ
 惑へるる。桑の枝を、ふちるより、押へよ、長大な
 水を、押へても、かどまらず。といふこと、さる、此
 うあゝあらずや。 比賣鏡

女の四徳

同

女子四徳あり。一、四行とも名づく。周禮に見え
 たり。一は婦徳、徳を、心よそある善なり。二は婦
 言、言を、口よいふ言葉なり。三は婦容、容を、身よあ
 らそす形なり。四は婦功、功を、手よとるるわざなり。
 婦徳とて、かあるず、才智のせよ、すぐれ、つるを、
 もいとす。唯貞、順愛、敬の心を、むねとす。よく、身を
 守り、人よさるるを、憐れみ、廣く、謹み、深きを、いふ
 なり。婦言とて、かあるず、辯舌の、あざや、るるを、
 一もいとす。唯、聲ひきく、言葉よ、つや、りて、數す

くなく、うやくしきをいふあり。婦容とて、かならず、容儀のなまじりよ、衣裳のよまやうなるをいもいも、唯身もち、きぬきのそこ清く、居立ちあたまいひの、いうよて静なるをいふあり。婦功とて、必、藝能、人よすぶきたるをいもいもせず。女の事とす所、衣食の外をけねむ、学み績ぎ、たち縫ふとぶつるども、必、手づかひ、志なきひ、祭禮賓客のもてなりより、上下旦夕の事までをも、皆其すべ知りて、常もも、用意すべきたる。又、ぶがをいも、君、みやかこたごよ、春ももる食物も、必、みづかひ、心を付

けて、見備ちしし、進むを道とす。 姫鏡

静の貞烈、 室 鳩巢

静を、京師よて、名を得たる舞妓なりしが、材色をよめて、義経に寵せられけり。義経、都を落ちしとき、志づらも、吉野までつきまるといしが、それより、都へかへり居しを、頼朝、鎌倉へ召しよせて、義経の行くへをいもれくれども、吉野より末を志しぬよしを申す程よ、さうて放ち還へさるべかりしを、義経の子を、懐孕してありける程よ、誕生する迄とて、志づらく、とめられしが、兼ねて、舞曲の藝、世

子隠れあがりけねむ、頼朝その藝を見む如くして、
鶴が岡の祠にて、まをせしけり。静、心うき事子
思ひて、再三辞しけきども、志ひて命ぜしねしか
た、いふみ難くて舞ひけり。頼朝時といひ、所が
といひ、静、おならず、祝歌をこそ、唱ふくめと思え
れけるも、さそあきて、まづや志ら、志らぬをこ
まき、くりかへし、昔を今よ、たすよしもかま。又
押しかへして、吉野山、峰の志し雪ふみりけて、
入りよし人の、あとぞ戀しき。とかるをけねむ、
頼朝怒つて、今日の事をねむ、時世をぞ祝すべき

は、叛逆の、義経をさし事、奇怪なりとて、すてよ、
罪よも、處せしむるべかりしを、夫人政子のこびと
みて、事解けよけり。静、それを蒔芥ともせず、程経
て、都子歸りつゝ、一生世よ出でず、身を隠して終
りけり。かの、草も木もさびきし威も、恐れず、勢ひ
よ屈せず、始終心ざしを立て、義経よ負うごり
し事、高館よて、殉死せし輩とも、並び稱すべし。近
き頃、京師の醇儒、中村惕齋が、撰びしとかゆし、
倭漢貞烈の女を載せし、姫鏡と題せし書よ、これ
をいひ、残りけるこそ、遺恨なれ。うねむ、静、娼家子

生れて、出所、心かゝる故あるべし。それをもさ
るることなれども、名教を裨くるためよこ、これをも
も、捨つまじき事と、翁をかねて思ひ、ほども、今
申しつるぞかし。 駿臺雜話

昔の士風

同

秀康御、越前子封せられ給ひ、後阿閉掃部と
て、武功のほまれあり、者を厚禄よそ召し抱つ
らねけり。又、狗伊勢とて、これも、國よて、世禄の歴
々たりしが、嫡子子、鎧の着初めさせけるよ、かの
掃部を招待しつゝ、子子鎧きする事をたのみけ

申すつゝ、
申すつゝ、
申すつゝ、
申すつゝ、
申すつゝ、
申すつゝ、
申すつゝ、
申すつゝ、
申すつゝ、
申すつゝ、

り。こそ、饗膳すみ、祝ひの盃よ及び、時伊勢、今日
を、愚息が、鎧の着初めよて候ふまゝ、御身の御武
功の事、御物語り候ひて、彼も子御間うせ候へと
いひ、よ、掃部、いや某が身の上よ、御話し申すべ
き程の、武功を覚え申さず候ふ。されど、御望みよ
黙し難く候ふまゝ、某、一生の内よ、武者振りの見
事なる士を、一人見申して候ふ。其事を話し申す
べし、江州志津ヶ嶽の戦ひよ、暮れ方よ、某、一騎余
吾の湖のつくりを、引き候ひ、よ、敵とおぼく
て、うらゝり詞をかけ、故馬を引き返し候へ

む其人申し候ふを今朝よりかせぎ候へどもよ
き敵よあひ申さず候ふ御人體を見うけ幸いと
こそ存じ候へ。御不祥ながら御相手子なり申す
べしとて進みより候ふ故それこそこそ望
む所もて候へどもたかじよ馬を乗り放し既子
鎗をあせんとしけるよ其人志なく御待ち候
へ今朝より雜兵を多く突き崩し候ふ故鎗よご
れ候ふまゝ鎗を洗ひ候ひて御相手子より候
えんとて余吾の湖よ鎗をうちひうし二三遍洗
ひつゝさうとて突き合ひしや久しく勝負を

御相手子なり
申すべきとて
この文藝人の
おひきとてし
なれむきとて
ありあふべきを

かりし程も日暮れとて物のあやめも見え
ずなりぬ其時あなこより又詞をわけもなや鎗
先も見えず候ふ御残り多く候へどもこれま
でもて候ふ御いと申し候ふ御名を承り
こし候へ。某も青木新兵衛と申す者もて候ふと
て某が名をも承り候ひてこの後又陣頭もて出
合ひ候ふもたかじよ人手もたかり申すまじ
く候ふも又身方もて候ふも入りなく入魂鼓
し候ふべし。さうとて立ち分れしやこれ程見
事なる武士とつひよ見侍りず。いづなりとて

候ふもやと語りけるも其ころ伊勢が女とへ心
安く出入りをも青木方齋といふ浪士あり其日
女来て勝手も居たりしがこの物語りをききて
勝手よりもちりつてつゝ掃部も向ひてさても
唯今の御物語り承り今更昔を思ひ涙を落して
こそ候へ其時の御相手もなり候ふ青木新兵衛
とぞづかくなぐらう好等もて候ふかく申すぞ
かりもてそ浮きくる事もおぼすべく候ふとて
其時雙方の鎧のおどし馬の毛色を一といひけ
るが一つも違とさうけねむ掃部驚きつゝ扱を

久しくてあひ候ひて本望も候ふとて手前もあ
りい盃を方齋もさうぐれをさちしもとて腰の
脇ざしを抜きてひきけりそれより方齋が名國
も高くなりし程も秀康卿の耳へも達せしむむ
掃部と同ド禄もて召し出さるれけりとぞ青木
の武者ぶりの見事なるもさう事もて阿閉がか
れがとをひひ出で名のりあひてよるこひし
又伊勢が子の鎧の着初めも掃部を招ぎて子の
ためもとて武功の物語りを望みしつゝねもさ
しゝる事もてそをけねども其ころの士風武を

召し出さるれけり
けると切き初め
あつねと付し
ていのかかりの
重き付てきく例
なり又このか
かりとなのか
りの怪き付はけ
と切き初めを
ず此區別も注意
せよ

こゝろみりと知られ侍る。

駿臺雅話

細川幽齋文武の譽まれ 新井白石

丹後よも、藤孝入道細川忠興の父、幽齋、まゝ、年老
つゝも、いとけなき者どもをかり残り居て、お
かみしく、軍すべき者多かかず。されども、入道、こ
ろ古兵ついでよもて、少しも騒ぐ氣色なく、宮津の城をす
て、田邊の城よもたてらるり、あさましき遅くと待ち
居たり。そもく、此入道と申すは、弓矢うち物とな
て、堪能なるのみよあらず。さうぬ小藝よも、達
せずといふ事なく、天下よ雙びなき、多才多藝の

人なりたり。中よも、敷島の道よ深く好きて、古今
和歌集の秘訣、うつくしく、此人よ傳をれり。されど、
此度、ごが身討ち死よしたるん後、此道、長く絶え
なんとを悲み、城よ籠り初め、相傳の書ども取
り集めて、大内へ献るとて、古也、今也かたむぬ、
世の中よ、心の種をのこす言の葉、いふ一首の
歌、そつてぞ参らせける。かくて、丹波但馬の軍勢、
雲霞の如く押し寄せ、十重とつよとり巻き、水
火よなれと攻めければ、入道ちつともいります、
ふせぎ戦ふ。かくて、此城をかき、一時よ、攻め落さ

るべうも見えず。烏丸右大臣勅使として、大坂に
 行きむらひ、輝元三成等、勅鎧を傳へらる。それ
 和歌を我國の風として、天地開けらる。ありよ
 り、此方、百王の今に至る迄、其道長く傳へれり。然
 るに今、古の事を、歌の心をも知る人たあら
 ちよ、失せなんとも、朝家の歎きを。いづこ
 もして彼、二位法印が、つゝがたからんやうを
 かまぐらと、宣べられし。輝元を始めとして、奉
 行等、謹んで承り、いそぎ、早馬をこめて、寄せ手の
 軍をとむ。むもとより、入道も、今を最期と思ひ切

つて戦ひし程も、寄せ手とやすく、引いてかた
 んと叶ふべからず。此由、まゝ、都に聞えし。三
 條西大納言、綸命をふくみて、丹後の國に下向あ
 りて、速に勅に應じ、其城をさる。べしとありけれ
 ば、入道畏りて、普天の下、率土の濱、王土王臣にあ
 らずと、いふことなりと承る。まゝてや、この微賤
 の身、かくまのあこり、寵渥の辱きをかうふるを
 や。さりながら、入道が、年若き時ならん。まゝ、弓矢
 と、身の習ひ也。あへて、死を白刃の際に受けて、
 深く、恩を黄泉の下に、感ずる。ともあはるべし。今

ふらふら既よ傾きぬ。とと、此戦いよ、死する事を
くくんよも、餘命まゝ幾ぞとぞや。それを惜しお
るまどき身をら故よ、私の名譽をむさぼりて、い
くで、王命よとそむき参らすべき。と答へ奉りて、
やぐて、城を去つて、高野山よど趣きける。

藩翰譜

結城秀康、關東の大將を承ふ。

同

徳川殿、奥の景勝中納言御誅伐の時よ、上ぐとの
早馬來て、大坂よも、事起りぬと申す。御方の大名

あとを追うて
追ひてとある
なりふしくと
追ひてとある
づ

小名小山の御陣よあつまつて、軍評宣す。まら、此
所より引き返して、上方よ、向らせ給ふべきよ議
宣す。徳川殿、本多佐渡守正信を召され、家康西よ
向えん時、景勝やぐて、あとを追うて攻めとどろ
さしずえ、又關東よや乱れゆん。誰れや、此の所
に残り留つて、軍をさすべきと仰せらる。正信、誰
れと、更よ申すべき。守殿結城秀康よ、志く事やあ
るべきと申す。さうを、召せとて召す。守殿、御参り
あまよ、正信むかひ参らせ、いりよ、殿、天下の安
危を、今日よ渡し候ひぬ。能く、心して物申させ給

へして、御あしより従つて、御前より参る。徳川殿東西の軍の事、御物語りあり。其のちおこと、又おことあり。此の所よりまがりて、關東を鎮め給ふ。されども、上方より向つて戦ふと思ふといふ。よと仰せければ、守殿御氣色あしく成りて、秀康、いりて御後より、残り候ふべき。たゞ、いづく迄も、御さまをこと、駈け候ふべけれ。と宣へむ、上方の軍勢を、皆國々の集り勢、何十萬騎ありとて、何程の事あるべき。そも、上杉家も、累代坂東の大將より、中も、故輝虎入道が時より至り、弓矢取つて、天下より、肩

あしぬてそ
とを断れず必
よらずとあり
べき也

を雙ぶる者すくなかりき。さういふ、其子よりして、景勝、まご幼弱の昔より、軍の中より成長し、年既よりふけぬ。當時、おれより向つて、いやすく、軍せんもの多かりず。あらむれ、おこと、おこと、能きかづき、海道より向ひ、うちこゝみの軍せんより、おこと一人、こゝよりまがりて、軍せんより、且も、弓矢取つての面目、何事の孝行、これより、過ぐべき。と仰せければ、や、あつて、守殿軍をかゝらず、勢の多少より、^ぬと承る。上方の大將より、名を得る輩、すくゝあらず。勢の程も、又、さこそ多かりぬ。

秀康、いまだ軍をなすもねども、景勝一人が勢
 と戦はんも、何程の事あるべき。あはれ、大將をど
 ゝ御ゆるしあはむも、此の所もや、留り候ふべ
 きと宣ひし（さし）かむ、正信聞きもあへず。いしくも、仰
 せ候ふものおな。關東を鎮め給はんも、大將を参
 らせ給はんも、仰せもや及ぶと申しければ、徳川
 殿、ようれしげもて、頻り御涙を流されみつか
 ら、御鎧一領とり出して、そもく、此鎧を家康が、若
 かりしより身をつけて、終り、一度の不覺をおぼ
 えず。父が佳例も准へて、今度、奥方の大將として、

能き軍し、天下も、名を挙げ給ふべし。とて参らせ
 らる。守殿も、御心地よげも、御暇申させ給ひ、下野
 の國、宇都宮も陣取つて、關東を鎮め給ひし。上
 方の軍敗れてのち、景勝も、降を乞ひけむを、伏見
 も参り給ひけり。
 藩翰語

結城直政初陣の時、母の誡め、

同

左少將直政朝臣も、中納言殿（秀康の）第三の男、御
 母も、家の女房、中納言殿、越前國賜たり、伏見の御
 館よりかとして、入部し給ひし時、近江の中河内

といふ所にて、生れ給ひけれを、河内丸と名付け、
越前より入り給ひて、國松丸と改め、御寵愛淺から
ず。國松殿、十四歳の時、大坂の軍起る、御母上、國松
殿を、ちかづけ参らせ、殿を、まさしく中納言殿の
御子、大御所家康の御孫にて、さうせ給ふ。旗檀
を、ふと葉より、かろむいと申すところを、承れ、弓矢
取る家子生れ、既、十歳、あまうせ給へを、今度、
いねある高名をも、極めて、大御所の御感、預ら
せ給へ。あひ構へて、まことなびれ、人より、指
なす、れ給ひを、御父も、さう大將と、いやく

かゝる不覺
ある
徒のかりり
てをあれと
結びかこも
しむ故よの
ここの二字
ちさうよや

参らせけり
上は甲斐く
くどとわら
ねむ必けり
結ぶべきう

きもの、母よ、やどろせ給ひ、故よ、あくる、不覺
とあれを、いれ給えんと、口惜、かろべき御
事、候ふぞや。みづあ、いり、女ありとも、さ
る高名をも、せさせ給えぬと、傳へき、侍、を、
いきて、あつ、び、逢ひ参らすべしとも、覺えずと、
涙と共に、おき、く、き、て、軍の御装束、ども、甲斐く
し、く、ど、あ、つ、つ、め、出、し、参、ら、せ、け、り
藩翰譜

大江廣元を論ず。

同

廣元、累世王家の臣として、頼朝をたすけ、六十州
をして、其掌握、歸せしめ、義時を助けて、承久の

殺せー
殺すといふ語
を四段に活け
るを殺すとい
ふはあまへき也
みづからを
殺すといふを
殺すといふを
殺すといふを
殺すといふを
殺すといふを
殺すといふを
殺すといふを
殺すといふを
殺すといふを
殺すといふを

謀主たり。この人、當時の望みありしを、時政が
一幡を殺^せ。一時も、かれを假りてみづからを
殺^せ。およそ、義時が奸詐を恣にする、常よ、かれを
假りて、私を営みき。これを、此の人、ひとり、朝家よ
背きしのみよあらず。頼朝よも、そむきたり。其柔
佞多智、これよ、又、義時が垂あらず。玉海よ、頼朝
廣元よ委ぬるよ、腹心を以てす。思らくも、獅子身
中の蟲なり。このこと、ひし事、先見の明ありとい
ふべし。
讀史餘論

北條泰時、奸僧を逐ふ。

同

太田道灌が説き、泰時執権の時僧ありて、公も、
善心ありむ、一伽藍を建て給へといふ。泰時、建立
の事もありむ。其功德を、いりやといふ。一字
の伽藍を建立しぬれむ、治世安民、後生善所、子孫
繁昌の、功德ありといふ。泰時、佛法と、神道聖法と
を、何れも優劣ある。僧も、一へて、神道聖法と、佛法
よ、い及び難し。泰時笑ひて、一師、道よ、いりけれむ、
萬弟、道よ、惑ふと、か、事よ、いりべき。つが
國の宗廟、太神宮と、小社を、茅ふきよして、
せ給へども、御惠みと、秋津洲よ、みつ、和僧の心こ

仁徳記の歌よ衣こ
そくくむそま
てきと法へる
そ歌よを例あ
り古極と見ゆ
誤りよあらず
仁徳記の歌よ衣こ
そくくむそま

そ、正しかりぬ。功の大小よらず、志し道に協ふ
時を求めざるは善縁ありと、勧めたるよかりな
ん。それを賺して、伽藍してよといふも、大よ過れ
るよことを。今、伽藍を建てたるを、其費え大よして、國
の傾ひをさるべし。これ、安民の便をさらず、民を苦し
むるをさるべし。現世安穩とて、何をさつべき。世
を治め、後類眷属をさくむことを、現世安穩とて
すべき。子孫善なるを、祈らずとも、榮え、悪あらず
祈るとも、亡びをさるべし。この家業よよよく知る事
を難し。いんらんや、この道なきぬ事をや。聖賢の道

玉葉よ恨みのみ
の類也或説よえ
々々のきとけり
さる也といへり
いんらんや
あし
あしとつ小語
いんらんや
言よて
の活きるれを
いとつ小過去
辞を添ふるよ
誤りまり
か、賢才あ
りといふ
との下つへり
つ小詞あえり
きてて文意通
しがさる

神道の意の深長なる、いかに、知り盡すべき。一
天の主、萬乗の君も、渴仰し給へる佛道を、れを、あ
しとて申しがさる。和僧鎌倉にありを、政の妨
げともあり、浅智の人、家業を失ふ媒ちとも、なり
なむとて、鎌倉を、追ひ出さしけり。其後、鎌倉の僧
これに、畏れて、人をたぶさかさず。泰時か、賢
才ありと。時頼が代に、建長寺を建てしより、鎌
倉中子、五山とて、大なる寺ども、あまよ作り、其外
國に、み、寺を作ると、數を知らず。國の寶、大よ費
え、盜賊、巷にみちぬ。尊氏を、夢窓國師といふ僧よ、

又按むらま古寫
本も「ありし
ら」と見ゆ

たふりかゝれて、天龍寺をたて、あるまある
ぬ事ありき。武將の身として、かゝる道は惑いて
て、國を治むると、難かるべし。寺作る心さすあり
たむ、まづ、四海をみて、流離の民を、すくふてか
りどころを、あゝまほしけれ。
讀史餘論

封事の大意

同

廿七日参りし時、又封事を奉り。其ことの大意
を、(中畧)元享建武の間、皇統既し南北に別れ、南朝
を、幾程もなく、絶えさせ給ふ。北朝を、もとられ
武家のため、建てられ給ひぬれた、武家の榮え

をも衰へをも、共みせさせ給ふべき、御事ありし、
應仁の後世の乱うち續きて、武家既し衰へ給ひ
し上、朝家の御事を、申すも及むず。當家の神
祖、天下の事を、志し、めされし、及びてこそ、朝
家も、絶えざるを、継ぎ、廢れしをも、興させ給ふ
御事共もあるなれ。然るあれど、儲君の外、皇子、皇
女、皆々、御出家の事、おきて、今も、猶衰へし代
のさま、變り給はず。おとそ、匹夫匹婦の賤しき
も、子を生みて、かゝらず、其室家ありむを思ふ。
これ、天下古今の人の情なり。今、農工商の類、こゝ

給ふ事もなか
らぬ
もとの掛
りなれどな
らんとんま
そふべきそ

も、男も其資財を別ち、女も其婚姻を求む。ま
してや、士より以上、悉皆然らざるを。かゝる世
の習らるゝとなりて、年久しければ、朝家も、今
て、申させ給ふともなからぬ。これらの御事、願
てせ給ふべき處とも思はれず。たゞ、又朝家と
申させ給ふ御事こそなからぬ。これ等の御沙汰
なり、む事、上よ、仕うまつらせ給ふ處をつくさ
れ、とも申すべからず。當時公家の人々、家領の
程もあるなれど、皇子、立親王の事、おとしまさむ
みも、いり程の土地をか、奉らせざるべき。皇女御

ちんよ京まの
まいあうつ
つは法解か
こいもそる
んふとあり
し脱しそる
るや

下嫁の事、おとしまさむも、いり程の國財を費
し給ふべき。此の國、天祖の御後の、かくのみおと
しまさんよも、當家神祖の御末も、ときをかきと
み、榮えおとしまさんよを望まむと、いりよやと
候ふべき。されど、其が申す如くをむみ、これより
後、代々の皇子、皇女、其數多くおとしまさんよ至
りて、天下の富みも、つぎせ給ふぬ處ありぬべ
し。そと申す事も候はんか。古より、皇子、皇女、數十
人、おとしま^ち代も少からぬと、それ等の御の
ち、今よ至り給ふも、幾むくもおとしまさず。天地

の間も、大算枚といふ物のあるなりと、古の人
を申し送りき。これ等の事を人の智力の推し測
るべき處にあらず。唯理の當否をこそ論じ申す
べけれ。或も又皇子の御後多かむよしを、終よしを、
武家の御ため、不利の事ども出で来ぬへ計など
申すともあるべきや。高倉の宮の令旨より
て、諸國の源氏の起りし事もあれど、これを平相
國入道の、いづどのみ多くして、家滅びぬべき時
にあされりあり。もし、これ等の事を以て、誠めと
すべく、高時入道滅びし時、令旨なきなりと

梨本御坊ハ
護良親王事

申せし申きと
いふ語も四段
の法きあれと
申しとあり
べき也

梨本の御坊も、おとしまらざりや。これをたといひ
御出家の御身といふとも、それらの事ありと
を申すべからず。これ等を、唯武家御政事の得失
よこそ、かり給ふべけれ。すべて、これ等の事能
々、御心せさせ給ふべき處なり。と申すなり。
此封事御覽の後、仰せ下されし事あり。び三度
の後、申す所、其ことよりありけれど、これ、國家の
大事なり。能く御思惟あるべし。と仰せ下され
しよ、やがて、今の法皇の皇子、秀の宮より申す御
事、親王宣旨あるべきよしを、申させ給ひ送りけ

り。其後、又前代子、皇女御釐降の事を、仰せ定め
られき。これ等の事ども、これ、此國子生れて、皇恩
み、報い奉らせし処の一事なり。 折焚柴の記

近 體國文教科書上卷終

